

日本版 Learning Stories（保育者版・保護者版）の モデル開発とアクションリサーチ

小泉 裕子（児童学科・教授）・佐藤 康富（初等教育学科・教授）
大野 和男（児童学科・准教授）・関川 満美（初等教育学科・講師）
真宮 美奈子（児童学科・准教授）・森本 壽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）
上田 陽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）・塚田 菜絵（東戸塚保育園・保育士）

1. 日本版 Learning Stories（保育者版）のモデル開発の目的

（1）保護者の子ども理解の実態に存在する問題

子育て支援に関するわが国の動向は、平成以降、公的保育制度の中でも焦点化され、保育者の行う子育て支援が一つのモデルになっている。保育者達は、保育所や幼稚園に通う保護者の子育てに関する悩みや疲弊を受け止める役割と共に、子育てに関する指導・助言を行う役割も担っている。保育現場における子育て支援は、質的にも量的にも過大になっているともいえる。しかしながら、子育て支援の現状は、未だ課題山積といえる。

保育所や幼稚園等有する専門的意義は、子どもの発達や学びの姿勢を長期的に見すえ、一人一人の子どもの状況を把握した上で、子どもを理解し適切に支援・指導していくところにある。それに対し保護者の子どもを理解する力は多様であるものの、その時々の子どもの様子に一喜一憂し、他の子どもと比較したり、一般的な基準に照らし合わせて成長の速度や実態に悩み苦しんだり、喜んでいるのが現状である。

保育所や幼稚園が行う子育て支援の問題は、保護者との間に生じている子ども観（発達や学びの見方考え方）のズレや、子どもに対する相互理解の機会が不足していることにあると言えるだろう。

そこで、保育所保育指針（平成29年告示）では、保育所等における特性を生かした子育て支援の取り組みを強調しているが、特に、「保護者との相互理解」「保護者の状況に配慮した個別の支援」について特記されている。保育所等の行う子育て支援は、延長保育や休日保育、病児保育と言った量的な支援を行うだけでなく、如何に保護者と相互理解の下で協力して子育て支援を行うかが示されている。そこには、ア）日常の保育に関連した様々な機会を活用し日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明を通じて、保護者との相互理解を図るよう努めること、イ）保育の活動に対する保護者の積極的な参加は、保護者の子育てを自らが実践する力の向上に寄与することからこれを促すこと、と付記されている。このことから、保育所等が行ってきた子育て支援の取り組みを踏まえ、子育ての請負や補完といった受動的な保護者との連携ではなく、真の連携を見すえた子育て支援へとシフトしていることが伺える。すなわち、保護者の子育て観を育てる支援を目指しており、保育所保育の本来の目的や保育内容を、むしろ現場から積極的に発信する取り組みが期待されているといえよう。

(2) ニュージーランドのプレイセンターの事例より

わが国の保護者と保育者間に有る子ども観のズレが、結果的には子育て不安を増長しかねないことより、保護者の子ども観を保育者に近づけることが重要であると考えた。

筆者等のニュージーランド研究の中で、保護者が運営する保育施設「プレイセンター」における **Learning Stories** の取り組みに注目をしてきた中、日本版の保護者向け **Learning Stories** を開発し、直接保護者に活用し子ども理解を促す一助にするべく研究を開始した。

1) NZ におけるプレイセンターの概要

(NZ プレイセンターの特徴)

管轄はニュージーランド教育省であり、保護者による運営に任される（非営利、一部営利組織もある）。参加する子どもの年齢は0から5歳の誕生日までであり、保育時間は2時間半から4時間のセッションが基本である。保育者は親であり、PC 協会の認定する学修プログラムを受講することが義務づけられている。保育は当番制であるが、2歳6ヶ月未満の乳児は、親が同伴でなければ参加できない。保育料として、政府から補助金が支給され、1週間20時間まで無料となる。親たちは自主的な保育運営を行うために、単に子どもを預ける施設として利用するのではなく、いくつかの基本的条件を遂行し参加することが求められる。

- ①セッションに参加すること
- ②研修に参加すること（ワークショップやコース学習）
- ③運営会議に参加し、子どもたちのあそびに関する計画を立てること
- ④円滑に運営するために様々な役割を担うこと

統一カリキュラム「テ・ファリキ」の導入に伴い、PC においても実践の原理としてテ・ファリキが貫かれている。PC では親がサポートしながら実践する。未熟な親は経験のある親たちとチームになることで、自らの育児を客観的に振り返る機会を持つだけでなく、成人教育（＝親教育）を充分に受けながら子どもを育てる知識やスキルを身につけていく。PC の理念は NZ 国内だけでなく、日本の子育て支援対策にも影響を与えている。（2009日本プレイセンター協会）児童研究 vol.94、pp.60-62（小泉2015）より引用

NZ のプレイセンター（以下 PC）は、終戦後の混乱期、幼児保育施設が不足している時期（1944）に「親が子どもの最初の教師である（**Parents as first Teacher**）」という理念の下、親教育プログラムを受講した親とその子どもが共に過ごす保育施設として発達してきた。1986年の幼保一元化の際には、政府から補助金が支給される施設型サービス機関として認定されており、PC 協会認定の資格を有するスーパーバイザーが活動の中心を担い、他の公的保育施設と同等の質を維持する等、乳幼児教育サービスの一躍を担っている。NZ 全土には4,123の補助金対象の施設がある中で、11%（461施設数、約17000人）の実績がある。（2009）

筆者が注目するのは、保護者が中心となる乳幼児保育施設の運営等に関する基準であり、我が国に置き換えるなら、全国にある保育所や幼稚園等の全ての保育や教育の水準を維持するために設けられている「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」に相当するものである。それが上掲した国家統一カリキュラム「テ・ファリキ」であり、同時にマーガレット・カー等が推進した子どもの発達評価（**Learning Stories** 等）の実施である。子どもの育ちに保障するために提言された国家的取り組みが、保護者による運営主体のプレイセンターにま

で浸透している。

プレイセンターでは、セッションを担当する親教育を徹底しており、その学修テキストには、次のような記述がある。

「セッションにおける大人の役割」

（１）グループによる指導（スーパービジョン）

プレイセンターは、保育を進めるための保育者を雇っていません。保育に参加する大人全員が、そこに参加する子どもたちの福祉や学習等の発達が保障されるべく責任を持つために、相互に教え合い指導しあっていくものです。

（２）プレイセンターでの評価とは

プレイセンターでは、常に子どもたちが活動していることや、創作していること、話していることに気づいていきましょう。そしてそれらが学びに変わることを理解するとともに、子どもたちの要求や発見の機会に反応していくことです。

（I noticed）気づきとは、子どもたちのやっていることや人間関係やものとの関わりを観察しわかったことです。

（I recognized）認識とは、子どもたちが学んでいることやどのように学んでいるかを理解することです。

（I responded, what you might liked to do next）反応とは、貴方の援助について自問することです。すなわち、貴方の反応が子どもたちの思考を広げることができたか、子どもたちにその活動の意味づけをさせることが出来たかということです。最も頻繁に使用されるアセスメント法は、逸話（エピソード）やラーニング・ストーリーです。

我が子や友人の子どもたちと接する際、一人一人の子どもの発達や状況を理解することの重要性と、その方法の具体性を明記しているところが、我が国には散見されない親教育プログラムで有り、極めて興味深い。

２）Eden/Epsom Playcentre の視察調査に基づく研究報告

オークランドに所在する（Eden/Epsom Playcentre）に於いて、保護者の作成する Learning Stories の成果と課題について調査した結果を報告していく。

（資料１）Eden/Epsom Playcentre で複数の親たちとその子どもたちが遊ぶ様子



Figure1



Figure2

写っている大人は、全て参加している子どもの親である。セッション中は子どもの自発的、主体性を尊重した遊びの援助が基本である。



Figure3



Figure4



Figure5

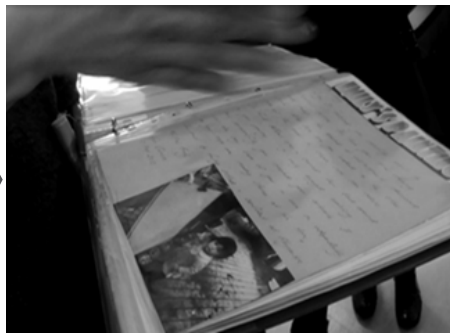


Figure6



Figure7



Figure8

日本人のAさんで、実際に **Learning Stories** を書いている場面時にインタビューをした。「NZ に来て友人を作りたい一心で、プレイセンターに来ました。一緒に子育てをするので気持ちが楽になりますが、ラーニング・ストーリーを書くのは大変でした。今でも書くときは、「アー書かなきゃ行けないのか」と思うのですが、後になると、もう時間は戻れないですね。2013年に自分が書いていたものを見ると、アーすごいこと書いているなと思うのです。だから今書きます。過去は振り返れないので、今書くのが一番良いと思っています。例えば、自分の娘の友だちができて、一緒に遊ぼうよと自分から言えるのは大き

な進歩だったので、それをタイトルにして作りました。」と語っている。(Figure6)

彼女はその後、仲間のペアレンツと情報を共有する話し合いの場所に向かっていった。話し合いは、子どもが遊んでいる傍らで、同時に行われているのが印象的であった。(Figure7,8)

子どもを連れて参加している親の何人かは、実際に子どもの遊びの様子を観察し関わりながら、記録を取っている。一方で書き上がった記録を見せ合って、互いに子どもの様子を語り合っているという情景が目前にあった。

次に我々は、このセンターのリーダーである Carmen さん（コース4修了者）にインタビューを実施した。インタビュー内容は事前に質問紙を送付し周知している。

まず始めに、ラーニング・ストーリーの作成のプロセスを紹介してくれた。



「子ども達が色々やっていることや様子を観察し気づいたことを書きます。(notice)、次にそれがどのような意味を持つのか、何に繋がっているのかを確認します。認識するに当たっては、学習の構え (learning disposition) を見極めます。さらに、子どものアクションを次にどのように展開していこうかを考えます。

記録の三段階、すなわち、観察し、子どもの発話を聞き取り、それを書き取ります。次に子どもに話しかけることで反応してきたことを書き取ります。三段階目には、これから子どもが自分自身で何をしたいかを聞きます。これが書き方の基本です。

1年を四期に分けており、一期には自分の子ども以外に2人の子どものラーニング・ストーリーを書いています。人によっては沢山書ける人も有り、そうでない人も居ます。見取りという作業は、ほんの一瞬の場合も有り、2～3時間、あるいは数週間観察した結果の場合もあります。文章は、写真を入れたりして構成しますが、一時間程度でまとめるひともいます。

子どもにとって興味深いか、楽しいか、意味があるのか、そのエピソードを見取ります。これらが子どもの学ぶ構えの全体像になるのです。子どもの新しい技術 (skill)、興味、好きなやり方、人間関係、全てが意味を持っています。学びの構えとは、なにかを学ぶときの姿勢です。好奇心、確固たる自信、興味と言ったカウントできないものなのです。見る親によって、行動の意味の解釈は違います。マオリの人たちの学びの構えは、ハーモニーだったりします。記録にはこの「学びの構え」を書くことが重要です。

そして、子どもの観察結果には、親同士でたびたび話しあっています。セッションをしている傍らで行うわけです。PEA meeting (Planning, Evaluation, Assessment) で、参加している親の観点を話し合って、記録を作ります。新米ママには、ワークショップを開く

こともあります。特に **Recognized** は、非常に難しいです。何を学んでいるかを解釈するのは親によって異なるからです。だからこれは十分に話し合います。」

(Q: 子どものネガティブな経験は書かないのか?) 「悲しい経験はフォーカスしない。書いてしまうと、それに焦点を当てることになるからです。」

最後には、テ・ファリキのどこに準拠しているかを確認します。子どもの学びのためのラーニング・ストーリーを書きます。」

(Q: ラーニング・ストーリーを書く喜びは?) 「喜びは、子どもを観る眼ができて、より深く理解できるようになることです。書かなかったら、フワフワ消えて言ってしまいます。子どもにも分かるように書くので、それがまた子どもに良い影響を与えています。」

(Q: 難しいところは?) 「難しさは、子育てをしながら書くことの大変さだったり、他の子どもを観察しているときに我が子が側にやってくる。最初は書くことが負担だが、慣れてくるとこれを書くことで感謝することが増えてくるし、研修を受けながら、書くことの意味も分かってきます。初心の時は、クオリティは問いません。子どもの言葉が入っているだけでも良いのです。子どもにとって非常に価値のある記録、生きた記録だと思います。私が書く記録で、友だちの家族が喜ぶのです。学術的な裏付けがなくとも、それで子どもの様子が見えれば良いのです。「雨の中の散歩」というストーリーには、子どものプラン(主体的に行動する)が入って、ただ楽しそうな笑顔や様子の写真が載っています。子どもがしたいことのプランニングを大事にします。幼い子どもではわかりにくいのですが年長のこどもは、はっきりやりたいことをプランニングしています。」

(Q: 大人からのサジェッションは?) 「サジェッションは「～しましょう」ではなく、「～したいかなあ」という程度です。結果行動を決めるのは子どもです。答えのないサジェッションでしょうか。オープンマインドで、子どもが次々にやることを受け入れていきます。ただし、「なぜそうなったか」という理由は書きます。」

(Q: 虐待をする親はいないか?) 「このセンターに集まる家族には、虐待をする人は集まってこない。もし虐待が疑われるようなら、すぐに役所に報告しますが、そんな経験はありません。ポジティブな親がこのセンターの主旨に見合っています。記録を作ることは大変だが、現代の母親に見合った書き方も改善されています。」と語り見せてくださったのが、自作のラーニング・ストーリーであった。彼女の娘が描いた絵や作品等も含まれ、ポートフォリオや、日本で言うアルバムの様でもあった。学びの構えを難しく捉えなくとも、書き記すことに意味があると考察できた。

3) 日本版 Learning Stories (保育者版) のモデル開発への示唆

このインタビューは二時間にもわたったが、親がラーニング・ストーリーを書き続けることで、自分の子どもを理解することに繋がっていると言うことを強調しており、内容の広範性や多様性を受け入れる等の改善を取り入れながら、親の書くラーニング・ストーリーの意義を広めたいと話す熱心な姿に感銘を受けた。親自身が成長するために、ラーニング・ストーリーを書くことに意味があることが推察される。幼児理解力を育てポジティブな親へと成長させる効果が期待されそうである。

以上、ニュージーランドのプレイセンターでの事例を考察した結果、親自身の幼児理解能力を育てる取り組みが重要で有り、ラーニング・ストーリーのような記録を作成が効果的であることも示唆されたが、わが国にはプレイセンターの親のように子どもの発達を記

録することや、適切に評価する経験がほとんど存在しないため、わが国の保育制度や親の実態にあった日本版 Learning Stories（保育者版）を開発する必然性を実感している。

家庭で育児をしている一般の親、保育所や幼稚園に子どもを通園させている保護者が、子どもの発達を適切に評価し、育児の喜びが実感できる“Learning Stories”を目標に、現在開発を試みているところである。